

## 韓国におけるトキ復元事業の状況

### 1. 視察概要

韓国慶尚南道からの日本のトキ専門家の招聘依頼を受け、2017年9月5日から8日に、新潟大学関島恒夫教授と環境省佐渡自然保護官事務所岡久希少種保護増殖等専門員が昌寧郡トキ復元センターおよび牛浦沼等を訪れ、韓国におけるトキ復元事業への指導・助言等を行ったもの。

#### (1) 飼育状況

中国由来のファウンダー4羽（♂3羽、♀1羽）から飼育繁殖が始まっている。現在は313羽程度を飼育しており、飼育個体数の上限は400羽程度である。

遺伝的に相同性の低い個体を繁殖させる方針だが、きょうだいを繁殖させている事例も複数ある。全て採卵して人工ふ化・人工育雛を実施しているため、1ペアから年間7羽以上のヒナが生まれる場合もあり、個体数が急増している。また、人を見ても逃げない人馴れ個体ばかりである。トキが人間を警戒しないため、観光客がトキを飼育しているケージの中に入ってトキを観察する施設がある。



トキ復元センター



立ち入り可能なケージ

#### (2) 放鳥について

2018年1月から放鳥に向けた訓練を開始し、2018年4月に最初の放鳥を予定している。最初の放鳥は日本と同様のハードリリースを行う予定だが、二回目以降の放鳥では順化ケージからトキが自発的に出ていくのを待つソフトリリースを予定している。

順化ケージは70m×50m×20mの円形ケージであり、佐渡島の順化ケージに似た放鳥口が設置されている。牛浦沼の水を引いて採餌環境を造り、周辺の樹木を移植するなど、できるだけ周辺環境に似せている。



順化ケージ



順化ケージ内の様子

### (3) 放鳥予定地の環境について

周辺農地では、水稲とタマネギ（またはニンニク）の二毛作を行っており、稲刈り後に水田を干してしまうため水生生物が死滅している。また、一部でビオトープをつくっているが、ドジョウが生息していない。そのため、トキのエサ場としての農地の質は不透明であった。

農地以外の環境としては、沼沢地、湿地、砂州の残った河川、河畔林などについて豊かな環境が残っており、佐渡島よりも自然度が高い。多数のクロツラヘラサギがウポ沼の天然湿地をエサ場としており、トキについても天然湿地が餌場として機能する可能性がある。

周辺森林は 40-50 年程度の若齢林であり、マツ類が主体となっている。佐渡の営巣環境と比較すると木が細い。



牛浦沼の様子



牛浦沼の様子